

編集のことば

昭和九年の春、某氏は卒業論文のテーマを「明治初年の東京語の研究」として、時の主任教授に相談したところ、博士はしきりに頭をかたづけながら、「それは君の自由だが、就職の方は保障しないぜ。」と言われたそうである。これが伝わって帝大新聞に、このような研究が出るに至ったのは、「象牙の塔の権威も地に落ちた」ことを示すという意味の批評が掲げられたという。事実、国語研究の諸部門のうち、最も多くの学者によって、最も多く研究されてきたのは、国語史であった。国語史の研究にあらずんば国語学にあらず、ということが疑われなかったのである。

さて話題にされた某氏は、今その東大講師を兼ねて、国立国語研究所の中堅として活躍中である。まさに隔世の感ではなからうか。終戦後はとりわけ国字国語問題の沸騰、言語教育の躍進に伴って、現代語の研究が前面に大享しにされ、過去の国語史の研究は片すみに押しやられた形となった。勢いのおもむくところ、若い学徒の中には、昔の国語を軽んじ、まったく関心を示さないものさえ、ぼつぼつ現われてきたようである。

現代語の研究は、もとよりたいせつである。日本人はひとり残らず、わが民族語を正確に力強く話し、聞き、読み、かつ書くことができなければならぬ。そして、この達成のためには、ここまで発展してきた母語を、その歴史において正しくつかむことが、特に言語の場合に欠くことのできない要素であることをみとめて、はじめてあやまりなくおこなわれるであろう。祖先の使ったことばの研究は、現代語に比べて、はるかに困難である。だが、この困難を避けては、悔いを民族の将来にのこす憂いはないだろうか。

ここに業績の多岐にわたる国語史研究において、どんな方面があり、それぞれの方面にどんな成果と課題とがあるかを、精通しておられる諸家に願って、この特集を編んだしだいである。(金田一春彦)